

研究領域名	トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現
領域代表者	山口 真美（中央大学・文学部・教授）
研究期間	平成29年度～平成33年度
研究領域の概要	<p>本領域では、顔と身体表現の意識化されない点を意識化することにより、文化の中で閉じたコミュニケーションを理解し、異文化が相互に行き交うトランスカルチャー状況下における他者の受容を導きたい。顔や身体は目前に物理的に存在する対象であるため、多様な分野の共通の研究対象となりうる。現実の顔や身体表現とその認識様式を実証的に検討し、文化的多様性とその背景要因を調査する。そこからメカニズムの解明や社会組織上の再考が可能となり、顔と身体表現から時代や社会を考察することもできる。人文・社会科学を中心としたアプローチで、トランスカルチャー状況下における顔身体学を考える。</p>
科学研究費補助金審査部会における所見	<p>本研究領域は、それぞれの文化内で無意識に行われている顔と身体表現を意識化するプロセスを通して、文化の多様性とその背景要因を探ること、さらに、異文化理解と受容を目指す点でユニークであり、かつ、学際性と国際性も備えた提案である。前身である新学術領域研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」（平成20～24年度）では、工学、医学、心理学や脳科学研究を中心に顔認知のメカニズムとその発達や多様性を明らかにしたが、本研究領域ではそれらの知見を踏まえた上で、そこではあまり考慮されてこなかった顔認知に対する社会や文化の影響を、哲学・倫理学・文化人類学・心理学など人文・社会科学的アプローチで取り組む点で格段の発展と飛躍的な展開が期待できる。</p> <p>各研究計画の達成目標は具体的、かつ、明確であり、国際的なネットワーク構築の計画も良好である。公募研究は各研究課題と密接に対応しており、さらに、若手研究者を多く採用することで人材育成にも十分配慮されている。</p> <p>ただし、研究計画書全体を通して文化に関する概念についての統一的検討が不足していることに加え、本研究領域における複合的な知見をいかに統合するのか、といった課題もあり、領域内での有機的なつながりを一層促進するための工夫や、計画研究組織間の連携強化が望まれる。</p>